

戦中戦後に過ごした幼い日々の記憶—令和への節目にあたって

幼い子供が家族と一緒に遊んでいるほほえましい光景は、自分の幼児期の記憶にない。

自分が生まれた昭和 14 (1939) 年にヨーロッパで第二次世界大戦が、二歳の時に太平洋戦争が始まり、終戦の翌年に国民学校に入学した。

「焼け跡世代」とかいう分類で括られる世代に属するようだが、戦争時代や戦後の混乱期の体験は個人によって様々であるから、そうした分類に拘ることもないが、幼年時代と少年時代をまさに戦時中と戦後の混乱期に過ごした世代である。

自分の肉親や近い親戚には、幸いにも戦争によって直接亡くなった者はいなかったし、特に悲惨な体験をしたわけではないが、空襲警報に怯え、食べ物は不足し、不自由な生活を強いられた幼い頃の体験は、80 歳を超えた今でも忘れることはない。

悲惨な戦場の話や、直接被災をした人たちの経験は伝え続けられていかなければならないが、それだけでなく、さまざまな人たちが戦争時代を体験し、尋常でない生活を強いられた人たちの経験は、二度と過ちを起こさないために、平和な時代の流れの中で埋もれてしまわないようにすることも重要だと思う。

終戦後 70 有余年を経た今日、平和で自由な生活を過ごすことが出来、物資や食べ物が豊富にある時代の有難さを常に意識し、感謝をしながら毎日を過ごしている。

自分の祖父西脇静は、号を呉石という書家であったが、幼い時から端麗な書を書き、神童と言われていたそうだが、文部省の「書き方手本」の筆者としても知る人が多い。

29 歳の時に故郷の福井県勝山から東京の青山に移り、長男である自分の父親は、路地を挟んだ向かいの家に住んでいた。

建築技術者の父親は、東京帝国大学建築家を卒業し、大倉組（現在の大成建設）に勤めていたが、日華事変の勃発により昭和 12 年に召集を受け鉄道隊に入った。

中国大陆北部に渡り各地を転戦し、13 年暮に帰還した後も軍務に服し、家にはほとんど帰れなかったようだ。

自分が四歳の時に二度目の召集を受け、中国大陆中部に渡った。

父が召集され、戦況も厳しくなってきたために、家族は、母の郷里である埼玉県の高橋村に疎開し、終戦の翌年、小学校一年の夏休みに東京に戻り世田谷の弦巻に住んだ。

父は平城で終戦を迎え、一年半程の捕虜生活の後、自分が小学二年生になる直前に幸いにも帰国することが出来た。

青山の家にはいた頃の記憶は断片的にしか残っていないし、特に父親との思い出は二歳までのことで

少なく、明け方に父親の布団に入って寝たことや、叱られて玄関の外に締め出されたことなどは何となく記憶に残っている。

後に「敏夫が一歳の時に、はしかと肺炎を併発して、あの時はもうだめかと思った」と言っていたが、そういえば広い座敷に一人で寝かされ、毎日、医者が来ては尻に太い注射をしていき、体中に赤いぶつぶつが出来て痒くて仕方がないが絶対掻いてはだめといわれ、回りをそっと掻いていた記憶があるが、あの時がそうだったのかと思っている。



写真が好きだった父親は、青山の自宅にいた時の写真をアルバムにして、それぞれの子供に残しておいてくれたので、当時の様子はその写真で伺い知ることが出来る。

この写真は、自分が 2 歳の時に自宅の前で撮影されたものだが、近隣の様子が分かる。

道路の舗装はされていず、周りの家の塀は木の板塀で、それぞれの門前には防火水槽が置かれている。

隣組で消火訓練のバケツリレーをやっていたことも、記憶に残っている。

しかし、そうした思い出よりも、灯火管制で照明を黒い布で隠し、真夜中に空襲警報と「敵機来襲！」という声でたたき起こされて急いで防空頭巾をかぶって外に出ると、サーチライトに照らされた爆撃機が轟音を轟かせて頭上を低空で飛んで行ったり、庭に作った小さな防空壕に潜り込んでじっと息をひそめていたり、近所が燃えているのか防空壕に火の粉が飛んできて怖くなったり、昼間に頭上で戦闘機が二機、空中戦をしているのを見た記憶などが鮮明に思い出される。

近くの幼稚園に入園し、二、三日通ったと思うが、何故か分からないままに行かなくていいと言われた。

母親の実家の伝手で、埼玉県の高階村に疎開することになったのだ。

東上線の「新河岸」という駅から、歩いて 15 分ぐらいのところにある I さんの家で、茅葺き屋根に土間のある農家の造りの民家の、重い板戸で仕切った一間に母子 5 人が間借りをして住むことになった。

白髪混じりの I さんは木材会社に勤めていたようだが、兼業農家だったのか、刈入れの時などは庭に大勢の人が集まって脱穀の作業などをしていた。

母親は、時々東京に戻って家の片付けなどをして、大きなリュックサックを背負い、風呂敷包みを抱えて夜遅くに戻ってきた。

暗くなってもなかなか戻らない母を、幼い妹と駅まで迎えに行き、次の電車にこそ乗っているだろ

うと何台も待って、あきらめて悲しい思いで家に戻ったことが何度もあった。

食べる物がなく、母親はその調達には苦勞をしていたようで、買い出しに行くといって、よく着物などを持って農家を回っていた。

一度ついて行った時は、回る家々で冷たく扱われ、断られた家の軒下にあった野菜を「それは捨てるやつだから持って行っていい」と言われて貰ってきたことがあった。

食事は、たまに麦飯の時もあったが、大根や人参が少し入っただけの雑炊か、サツマイモやカボチャだけの時が多く、顔など身体が黄色くなってしまった。

飛行機の音がしたなと思っていたら、間もなく「落下傘だ、落下傘だ」と言ってみんなが騒いでいる。見上げると青空に白いものがゆっくりと降りてくるのが見えた。

しばらくすると、役場にアメリカ兵がつながれていると騒いでいて、みんなについて見に行った。

役場の前庭にある大きな樹の根元に、初めて見るアメリカ兵が後ろ手に縛られ、裸足の脚をくの字型に曲げた格好で地面に座らされ、指の間に鉛筆のようなものを挟んで、足元の紙に何かを書かされているように見えた。

夜中に「東京が空襲で大変だ」と、遠くまで畑が続く見通しのいいところへみんなで見に行った。

Iさんにおんぶされ見ていたが、畑の先の東京の空が大きく真っ赤に染まっていた。

その中を明るい火の玉がいくつもゆっくり動いているうちに、ぱっと沢山の火の玉が増えて、ますます空が明るく赤くなるということが繰り返され、長く続いていた。

そんな異様な光景に、みんなは「大変だ、大変だ」と見ていたが、そのうち無言になってしまった。

自分には状況が十分に理解出来ず、そのうちIさんの背中で寝てしまったが、あの異様な光景は目に焼き付いていて忘れることは出来ない。

昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲だったのだと思う。

巨大な炎の下で、十万人に及ぶ人々が亡くなっていたのだ。

その後の 5 月 15 日の山手大空襲の時だと思うが、青山の自宅と、路地を挟んで向かいにあった祖父の家も、書家である祖父の作品などとともに全て焼失してしまった。

祖父母や我家の家族は疎開をしていて助かったが、まだ東京に住んでいた時には「空襲になったら青山墓地か明治神宮のどちらに逃げるか」と話していたようで、いずれにしろ命はなくなっていたかもしれない。

その日は昼前に何か周りが慌ただしくなって、そのうち庭の中央にラジオが置かれ、その前に皆が集まって整列をはじめ、母親も後ろに並んだ。

どうしたのかと思っていたら、ラジオから流れてくる声を、皆が頭を垂れて神妙に聞いていた。
終戦を知らせる玉音放送だった。

昭和 21 年に国民学校に入学したが、教科書の文章をところどころ墨で黒く塗り潰す作業をさせられた。

進駐軍が来て、見られてはまずいところを隠すのだと云われ、それでも見つかったら何をされるかわからないと思い、教科書をどこに隠せばいいのかと考えたりした。

自分は絵を書くのが好きで、野菜や果物など食べ物の絵を小さな紙に描いて、皆に「上手ね」と言われて得意になっていた。

学校で配られる紙は、わら半紙という浅黒い薄いざら紙で、鉛筆で書こうとするとすぐに破けてしまい、絵や文字が十分に書けないのが不満だった。

戦争は終わっても食糧難は相変わらずで、国民学校の先生が「昼ごはんは何を食べているか」と授業で聞いたことがあり、皆は手をあげて「白米！」とか「饅頭！」とか大きな声で言っていたが、自分は「雑炊！」と言って手を挙げていた。

先生が何時までたっても「雑炊」と黒板に書いてくれないので、書いてくれるまで大きな声を出し続けた。

後日、母親が「先生から『随分と儉約されているのですね』と言われ、恥ずかしかった」と言っていたが、自分はそれが当たり前だったので何が恥ずかしいのか分からなかった。

四歳年上の兄は、弁当を持って行っていたが、母親に「弁当が粗末で恥ずかしくて食べられない」と陰で泣きながら訴えていた。

一年生の夏休みに東京に戻ってきた。

祖父が、世田谷の弦巻町に小さな家を用意してくれていた。

玉電の「世田谷」の駅から歩いてくると、我が家の少し先からは畑が一面に広がっている街の辺境のようなところで、畑の向こうに「駒沢給水所」の円筒形で人気のない不気味なツインの建物が見えていた。

家は、戦後の復興用住宅だと思うが、6 畳と 3 畳に 2 畳ほどの板の間、それに小さな台所がついているバラック建築で、隙間風や雨漏りがあったが、自分たちの家に家族で暮らせて嬉しかった。

風呂は行水か、冬には近くの銭湯に行ったが、銭湯に行く時見上げると、寒空に満天の星と天の川がきれいに見えた。

檜葉の生垣で囲まれた敷地は広かったのも、母親は畑を作り、サツマイモやトマト、キュウリやナ

スなどの野菜をつくったり、鶏を飼って卵を手に入れたりしたが、食事には相変わらず苦勞をしていた。

母親が昼食に、トウモロコシの芯を粉にしてふかした団子を作ってくれ「これしかないから我慢して食べなさい」と言われたが喉を通らず、遊びに出かけて空腹をごまかした。

父親の消息はずっと分からなかったが、一年生の終わり頃になって、日本に帰ってきたという情報が入ったが、詳しいことは分からないままに半信半疑ながら希望をもって待っていた。

昭和 22 年 1 月、庭に広がる畑の中程にある門から、リュックを背負ってトランクを持ち、戦闘帽をかぶった男性が突然に入ってきたが、直ぐに父だと分かった。

この年の 4 月、国民学校は新制小学校になった。

父親が、子供達を上野動物園に連れて行ってくれたことがあった。

父親と一緒に初めての遠出だったが、動物園は休園で入れずに、他に寄るところもなく、公園のベンチで母親が持たせてくれた、卵そぼろだけがのっている弁当を食べた。

公園には浮浪児と呼ばれていた戦災孤児が大勢いて、そこでは食べたくなかったが、案の定、周りを取り囲まれてしまい、隠すようにして急いで済ませ、食べた気もせずに複雑な気持ちで帰ってきた。

小学 5 年の時に、目黒にある父の会社の社宅に引っ越した。

戦災前に住んでいた青山の、神宮前にある青南小学校に編入学し、目黒駅から山手線で渋谷駅に行き、都電に乗り継いで通った。

目黒駅までの「権之助坂」という大きな桜並木の坂道には、狭い歩道に様々な露店が立ち並んでいた。

目黒駅の駅舎と電車は木造だった。

小学校の隣には、大きな屋敷の焼け跡がそのままになっていて、放課後は毎日、友達とそこに入り込み、みんなでチャンバラごっこやかくれんぼをするのが楽しかった。

校舎には、まだ何人かの先生が家族で教室に住んでいて、三階を青山中学校が使っていた。

青山中学校に入学すると、その三階の教室ではなく、天井の鉄骨トラスが火災で曲がりくねったままの講堂に、つい立で四つに仕切った教室で授業を受けた。

二年生になると、外苑前にある青山小学校の校庭に建てた木造二階建ての分校に移された。

学校新聞の編集委員をしていたが、「暴れ者の二年生は分校に移され、新しい校舎に入れる話も、神宮外苑に丁度上がった花火が消えるようなものか」といった趣旨の記事を書いて、校長に睨まれた。

三年生の卒業直前の一月に、青山一丁目にある陸軍大学だった建物に全校が移ったが、直ぐに卒業を迎えた。

この建物に机や椅子を運んだ覚えはあるが、授業を受けた記憶はほとんどない。

こうして戦時中に幼児期を、終戦後の混乱時に児童期を過ごし、親に保護されている幼い時の断片的な記憶ではあるが、こうした空襲の怖さや生活の不自由さ、親の苦労などは忘れることはない。

我々より上の世代の、直接、戦地に行ったり、戦災に遭ったり、肉親を亡くしたり、戦争によるつらい悲惨な体験をしている人たちは、少なくなってしまった。

自分のような開戦から終戦までの頃に生まれた世代は、まがりなりにも戦争時代を体験した最後の世代になるが、それもだんだんに過去の人になりつつあり、平和な時代に生まれ育った世代が、日本の舵取りをする時代になってきた。

平成が令和になり、まさにそういう時代に入ったということを象徴している。

全てのことが、戦争の価値観で支配される世界の恐ろしさを、多少なりとも実感している世代の一人として、子供や孫にはそのような経験は絶対にさせたくないと思うとともに、何としても戦争は避けなければならないと思っている。

様々な価値観などが複雑にぶつかり合う世界のどこかで、国や民族などの間で争いが絶えない今日、日本で 74 年間続いている平和が、確かではないのではと考えさせられる出来事が増えてきた。

多様な価値観が共存し、自由な生活が出来ていると思える今日の日本では、自分達の生活や社会の総てが、平和であることを前提に成り立っていることを常に意識している。

この前提が崩れることを、絶対に起こしてはならないのだが・・・

常に、平和の有り難さをつくづくと感じるとともに、感謝をしながら一日一日を送っている。

(2019 年 12 月 記)

(このエッセイは、文芸誌「天塵」2 号に掲載した稿を、一部加筆修正したものである)